

ヨハネ 13:31-33a、34-35

13:31 さて、ユダが（晩さんの広間から）出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。

13:32 神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。

13:33 子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。

13:34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

<はじめに>

主の復活から第5週のきょうはヨハネの福音です。最期の晩餐のあとイエスが語られた長い説教（告別説教とニックネームがついています）の冒頭の部分です。その中で一貫して語られるのは「わたしは去っていくが何かが残る」という約束です。それは十字架と復活の後の弟子たち(わたしたちも含めて)にとっては、単なる将来への約束ではなく、自分たちの中ですでに今、実現している約束であるはずで

す。「何かが残る」といって、いったい何が残るのか？
復活したイエスが今もわたしたちとともにいてくださると
はどういうことか、を自分のものとして受け取っていきま
す。(これが復活節後半の大きなテーマです)

<新しい掟とふるい掟>

新しい掟、その一方にはふるい掟があります。「イエスの
掟」に対しての「モーセの掟」ということです。

「互いに愛し合え」と「隣人を愛せ」さてどこが違うのか。
モーセの命令はユダヤ人に対して命じられます。イエスの
命令は誰に向けた命令でしょうか。福音書では 11 人（ユダ
は最期の晩餐の席から立ち去った）に向けて語られます。
人数からいったらモーセが十戒を語る時のほうが多いこと
になります。ユダヤ 12 部族を合計するとだいたい 60 万人
ほどになります。

ことばが語られる時、聴衆の多い少ないによってその内容
の良し悪しが決まるわけではありません。

モーセの命令はユダヤ人にだけに限定される命令でした。
つまりアブラハムの子どもたち、ユダヤ人にだけ適用され
るものですが、イエスの命令はイエスを信じた人びと、ユ
ダヤ人以外、異邦人にも世界中に適用されことに気づきま
す。

そして今に生きるわたしたちは、モーセが 60 万人を前に
語った掟ではなく、イエスが 11 人に対して語ったことばを

模範としています。

<新しい掟のあやうさ>

新しい掟にはあぶない側面もあります。それは「壁の中の愛」と呼ばれています。

13:35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。

35 節は掟に対する約束、掟を守るとこのような恵みがあるという説明です。ここでは約束=めぐみは「あなたがたが弟子であることを、皆が知るようになる」です。

この、約束=めぐみの「あなたがた」と「皆」を対立している関係、対決・敵対関係としてみてしまうことが危ない側面です。

キリスト者だけが集まって「互いに愛し合う」、ほかのみんなとは別に自分たちだけで集まって「互いに愛し合う」こうやっている、みんなが知るようになる。

これが仲間だけで固まって、隠れてこそこそやっている、このように誤解して見られることがないでしょうか。

ユダヤ教を母体としたキリスト教の初期の過程でユダヤ教との対立はありました。そのような時代に、このイエスの言葉は信者にとっておおきな慰めになり、また宣教の方法のひとつでもあったのでしょう。

ただ、歴史においてキリスト教が多数派となった時代では、この掟は少数派に対する暴力になる可能性があります。

「なんじの敵を愛せ」といったイエスの顔はここには見えません。

「壁の中の愛」とはこのような閉鎖的な愛になる可能性への批判です。

現代の日本ではキリスト教は少数派です。多い少ないからみれば、初期キリスト教と同じ状況です。だからといって、イエスの新しい掟「互いに愛し合いなさい、そうすれば皆が知るようになる」をそのまま適用することは果たしてできるのでしょうか。

わたしは去っていくが何かが残る。

「互いに愛し合いなさい」といったイエスのことばを聴き、現代における意味を自分自身の中に問いかけて見ましょう。